

AJ フォーラム 24

漆芸の未来と貝桶制作プロジェクト

日時：2015 年 12 月 12 日（土）13:00 ～ 15:30

場所：世田谷キャンパス 34 号館 A306 教室

講師：「雲龍庵」北村 辰夫

コーディネーター：柴田 徳文（政経学部）

講師の北村辰夫氏は石川県輪島市の漆芸家。漆工房「雲龍庵」の棟梁として、徹底した技法研究に裏打ちされた漆芸作品を創り出してきた。氏の手による伽羅箱、絵香箱、印籠、文台硯などの多種多様な作品は、ロンドンのヴィクトリア & アルバート美術館やオーストラリアのハミルトン美術館に収蔵されている。また、ロンドン、パリ、シカゴ、ウィーンなど海外の都市でも氏の個展が開催されてきた。

フォーラム当日は、当センター研究員を中心にした 12 名の参加者に向けて、北村氏が推進した貝桶制作プロジェクトの内容と、伝統産業と地域が抱える課題と未来への展望についてお話をいただいた。

1. 貝桶制作プロジェクト

北村氏は、オーストラリアの日本美術愛好家からの依頼により、毛利家所縁の貝桶「菊蒔絵貝桶」の制作に挑み、職人 50 名の制作集団を率いて、平成 27（2015）年夏、約 2 年にわたるプロジェクトを完遂した。

「貝桶」は、「貝合わせ」（一つの蛤貝を見て、それと対となる貝を合わせる遊び）に用いる合わせ貝を納める道具であり、かつては公家や大名家の重要な婚礼調度品であった。しかし、近代以降は貝合わせが遊ばれることもなくなり、貝桶の制作も途絶えた。北村氏のプロジェクトは、一旦は途絶えた貝桶制作の高度な技術を現代に蘇らせる挑戦であった。

2. 「技術は人を呼ぶ」

講演の中で北村氏は「技術は人を呼ぶ」ということを説かれた。そして、高度な技術力に根ざした制作集団が伝統を次世代につなぎ、地域に事業を展開する可能性を示された。

伝統産業とそれを培ってきた地域が抱える問題には、売上減少、後継者不足などがあげられる。これまで技術を継承してきた徒弟制度も現在では維持できない。輪島塗として例外ではなく、そのような状況において北村氏は、制作集団モデルの構築を通じて、板紅（江戸の化粧道具）、十種香道具、腕時計文字盤などの制作・復元を実現させた。

集団モデルにおいては、一人の職人が自分の工程にのみ集中するのではなく、次工程の職人の利便性にまで思いを至らせる場面が幾度もみられたという。北村氏は、制作集団による事業展開が、①組織として制作法を学べること、②集団内の相互理解と尊敬を生むこと、③競争力とモチベーションが高まること、そして、④事業体として制作効率を向上させることを見てきた。

3. 「伝統」とは、昔と同じことではない

貝桶制作プロジェクトの困難さは、大規模な貝桶がここ 100 年は作られておらず、輪島にその技術が伝えられてこなかったことにある。このような作品は、写真や資料だけでできるものではない。職人たちが「現物」を見て、自分の「技術」を基盤にした「想像」が加えられて、貝桶が完成したのである。制作工程が昔の工法どおりかどうかは、北村氏にも、職人たちにもわからない。それでも、「伝えられなかった空白」の技術は、現在の技術と考え方で新たに創造され、復活したといえよう。

北村氏のお話からうかがえるのは、「伝統」とは、昔とまったく同じようにすることではない、ということである。このプロジェクトは、伝統を復活させようとする職人たちによる高度な試みである。伝統に対する「想像」と、それを回復しようとする自覚において「伝統」が現れてくるように思われる。プロジェクトの職人たちが「空白」にあったはずの伝統とは何かという問いを発するところに伝統が新たに出現した、あるいは蘇ったと言えよう。

もしかすると、伝統とは、必ずしも連綿として行われていることなのではなく、「失われている」という意識のなかでその力が現れるものなのかもしれない。

4. 新しい作品・技術への構想

その時代の市場の狭いニーズに応じているだけでは技術が途切れる。貝桶もその一例であろう。北村氏は、漆芸の技術を将来にわたって維持・展開させていくには市場の拡大・増大が重要な課題であると説かれた。そのためには、新しい作品の開発と技術の革新が求められるのである。この点においても、市場におけるネームバリューやプロモーションよりも、やはり技術が重要なのであり、ここでも「技術が人を呼ぶ」ことを北村氏はあらためて強調された。

北村氏のプロジェクトは、伝統を復活させると同時に、この先 100 年、200 年と続く伝統を作り出す構想でもある。その試行錯誤の過程において、結局、「先人のやったことに戻る」と、北村氏は話を結ばれた。